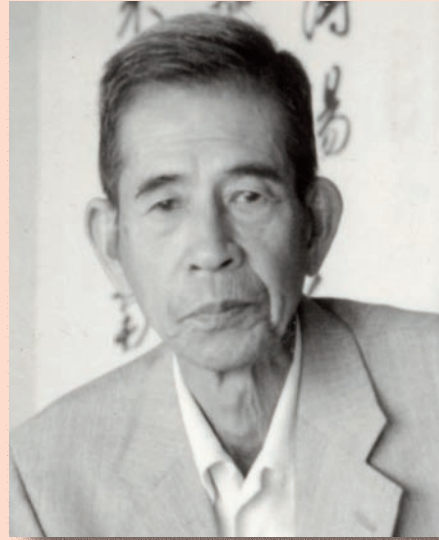


詩

上田敏雄

防府市
(1900～1982)



【著作】
詩集『仮説の運動』（昭和4・厚生閣書店）
詩集『薔薇物語』（昭和41・昭森社）
『現代詩の歩み』（昭和27・宝文館 共著）

上田敏雄は孤高の前衛芸術主義者として、独自のネオ・超現実主義を提唱した詩人である。
明治三十三年（一九〇〇）七月二十一日、吉敷郡大道路村（現・防府市大道）の大庄屋の家に生まれた敏雄は、県立山口中学（現・山口高校）を経て、大正十一年（一九二二）慶應義塾大学予科に入学。同大学英文科在学中の大正十四年（一九二五）二月、萩原朔太郎により『日本詩人』新進詩人号に推薦され詩壇に登場した。同年七月、同人雑誌『三田文藝陣』を創刊、これにポール・モランの「夜ひらく」（堀口大學・訳）論を書いて注目された。大正十五年（一九二六）四月、ヨーロッパのレスブリ・ヌウボウの洗礼を受けて前年の秋帰朝していた西脇順三郎が、慶應義塾大学文学部教授に就任。敏雄は、同じく慶應の学生であった弟の上田保等とともに西脇の文学サロンに参加し、その強い影響を受けるようになった。

敏雄は、昭和前期の超現実主義詩人の旗手として脚光を浴びた。ネオ・ダダリストとして『文藝時代』『辻馬車』『文藝耽美』などの同人雑誌に寄稿。昭和三年（一九二八）一月、日本における最初のシュールレアリスム宣言を、上田保、北園克衛と『薔薇・魔術・學説』第三号に発表する。他にも『詩と詩論』『衣裳の太陽』『Le Surrealisme International』などの同人雑誌において中心的存在として活躍、西欧二十世紀の詩の紹介導入に特筆すべき役割を果たした。昭和四年（一九二九）五月、詩集『仮説の運動』を刊行。仮説の詩観に支えられた純粹で斬新なイメージを展開した。だが、昭和六年（一九三一）を境に、約二十年間の詩的沈黙期に入る。

戦争中の昭和二十年（一九四五）三月、郷里の大道村に疎開し、そのまま定住。戦後、山口経済専門学校・山口大学文学部などで英語や英米文学を講じた。昭和二十五年（一九五〇）頃から、長い沈黙を破り詩壇に復帰。昭和二十七年（一九五二）十月には、詩誌『埴輪』（第二号より『DEMAIN』に誌名変更）を創刊し、三十三年（一九五八）の終刊まで、十一冊を刊行した。地方に在りながら、晩年まで独自の超現実主義的文學理論を中央詩壇においても展開し続け、前衛詩人協会に所属した。その独創性の背景には、仏教・カトリシズム・マルキシズムの融合があると言われている。昭和四十一年（一九六六）十月には、第二詩集『薔薇物語』を刊行した。昭和四十六年（一九七二）、宇部高等工業専門学校教授を退官。五十七年（一九八二）三月三十日、八十一歳で没した。（文・森川信夫）

讃美歌のためのアルゴ

君は人間の心をかき乱す新しい時代の騎士
人間の心をかき乱す
信仰の鐘の存在
君の声からすべての金曜日の朝は始まった
(中略)
僕らは森に迷いこんだ
僕らは泣き叫ぶ
だが君は質の星だ やぶれたボロ靴だ

だから百万人の合唱をききたまえ
讃美歌のために
逆立ちする教会の鍵を握るペテロよ

僕ら沙漠の労働者 人間の言葉にすくう偶像の呪いをエキソーサイズする第2の戦いに参加せよ

この絶対的に孤独である東京の赤の広場にうずまく合唱に

破れた絵のとびちる枯葉の嵐のなかで

(中略)

そして4月は残酷な月だ
僕らは投げ出された
僕らは引き裂かれた黒い手袋

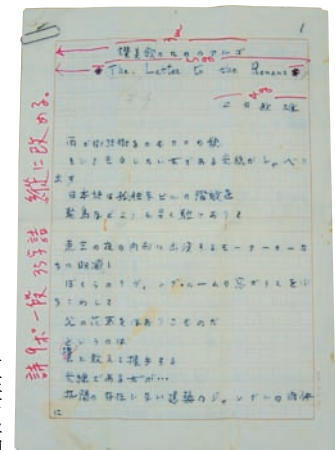
(『現代山口県詩選』1967年版〈山口県詩人懇話会刊〉より抜粋)

昭和49年（一九七四）8月撮影

七四歳



島津公由来「延齡松」石燈籠前で
(防府市大道の自宅庭)



直筆原稿

上田敏雄 年譜

明治33（一九〇〇）年	二二歳
大正11（一九二二）年	二二歳
大正14（一九二五）年	二五歳
昭和2（一九二七）年	二七歳
昭和3（一九二八）年	二八歳
昭和4（一九二九）年	二九歳
昭和5（一九三〇）年	三〇歳
昭和20（一九四五）年	四五歳
昭和21（一九四六）年	四六歳
昭和25（一九五〇）年	五〇歳
昭和26（一九五二）年	五一歳
昭和27（一九五二）年	五二歳
昭和39（一九六四）年	六四歳
昭和41（一九六六）年	六六歳
昭和42（一九六七）年	六七歳
昭和43（一九六八）年	六八歳
昭和44（一九六九）年	六九歳
昭和46（一九七二）年	七一歳
昭和48（一九七三）年	七三歳
昭和50（一九七五）年	七五歳
昭和55（一九八〇）年	八〇歳
昭和56（一九八一）年	八二歳
昭和57（一九八二）年	八二歳

7月21日、吉敷郡大道路村（現・防府市大道）の藩政時代以来の大庄屋の家に生まれる。五男一女の六人兄弟の四男。

4月、慶應義塾大学予科に入学。
2月、萩原朔太郎により『日本詩人』新進詩人号に推薦され詩壇に登場。7月、文芸雑誌『三田文藝陣』を創刊（大正14年10月の第2号まで確認）。9月、弟の保らと、文芸雑誌『文藝耽美』（徳田戯二主宰）創刊に参加（昭和2年11月終刊）。

3月、慶應義塾大学英文科卒業。11月、上田保、北園克衛らと、詩雑誌、『薔薇・魔術・學説』（日本における最初の超現実主義運動の機関誌）を創刊（昭和3年2月終刊）。

1月、上田敏雄・保兄弟及び北園克衛の連名で、日本における最初の自立的なシュールレアリスム宣言を発表（『薔薇・魔術・學説』第3号）。9月、詩雑誌『詩と詩論』の創刊同人として参加（厚生閣書店発行。弟の上田保も11月に参加）。11月、富士原清一・弟の上田保らと詩雑誌『衣裳の太陽』を創刊（詩名は上田敏雄の発案。シュールレアリスム運動の季刊機関誌。昭和4年7月第6号で終刊）。

4月、エッセイ「私の超現実主義」（『詩と詩論』）を発表。
5月、詩集『仮説の運動』（現代の芸術と批評叢書第5編・厚生閣書店）を刊行。

1月、上田保らと、『衣裳の太陽』を発展させた超現実主義機関誌『Le Surrealisme International』を創刊。6月、エッセイ「日本超現実主義詩論」（『詩と詩論』）を発表。

3月、郷里の大道へ疎開し、そのまま定住。

4月、山口経済専門学校（現・山口大学経済学部）の英語講師に就任。

10月、詩「現実と希望（作品二番）」（『詩学』）を発表。

4月、山口大学文学部の英語助教授に就任。
10月、詩雑誌『埴輪』を創刊。12月、詩雑誌『DEMAIN』（『埴輪』を改名）を創刊（昭和33年第11号で終刊）。評論集『現代詩の歩み』（宝文館）を刊行（笹沢美明・北川冬彦と共著。「超現実主義」を執筆）。

百行詩「讃美歌のためのアルゴ」（『THE HIBARBUE』）を発表。

10月、詩集『薔薇物語』（昭森社）を刊行。

11月、詩「讃美歌のためのアルゴ」（『現代山口県詩選』）を発表。以後一九八一年版まで、毎年同誌に寄稿。

詩雑誌『暦象』に参加。

3月、エッセイ「私のシュールレアリスム詩観——中野嘉一への書信から——」（『暦象』第64号）を発表。その後第96号まで、十三年間毎号『暦象』に寄稿。

3月、宇部高等工業専門学校教授を退官。

8月25日、『毎日新聞』西部本社版夕刊「詩人たちの戦後史」に上田敏雄を論じた記事が掲載される（筆者・境忠一）。

4月、エッセイ「反シュールレアリスム宣言I」（『暦象』第79号）を発表。

6月、日本現代詩人会日本の詩祭で先達詩人顕彰を受ける。『詩学』誌上に旧作の百行詩「讃美歌のためのアルゴ」が掲載される。10月、エッセイ「この盃を飲め」（『現代山口県詩選』）を発表。12月、『暦象』第94号で「上田敏雄の現在」特集が組まれる。同誌にエッセイ「この盃を飲め（神の表徴主義詩論）」を発表。

エッセイ「キリスト・リアリズムの演出」を『暦象』第96号に発表。最後のエッセイとなる。
3月30日、老衰により自宅にて逝去。享年81歳。7月、『暦象』第98号で「上田敏雄・追悼」特集が組まれる。

(提供・森川信夫)

上田敏雄